

最後方臼歯欠損に対してARCUSdigma II を用いて咬合採得をした症例

○福沢裕基, 中村健太郎*, 山本司将*, 細川稔晃**, H. W. Lang**

関西支部, *東海支部, **カボデンタルシステムズジャパン (株)

A Case Report of Prosthetic Treatment for Missing Backward Molar Taken Bite Registration Using ARCUSdigmaII

Fukuzawa Y, Nakamura K*, Yamamoto M*, Kondo Y*, Hosokawa T**, Lang HW**
Kansai Branch, *Tokai Branch, **KaVo Dental Systems Japan Co., Ltd.

I. 目的

咬頭嵌合位の安定を担う第二大臼歯の欠損補綴治療において、患者本来の咬頭嵌合位を崩すことなく補綴装置を装着するためには正確な咬合採得が要求される。最後方臼歯が欠損した口腔内で咬合採得を行う場合、患者に咬頭嵌合位を維持させかつその状態を正確に採得することは非常に困難である。これまでの日常臨床において嵌合させる咬合力の偏りによって、下顎歯列が偏位した状態で咬合採得を行ってしまい、作業模型上では正確に作製された補綴装置が、口腔内に装着されると咬合接触状態が不良になってしまったことを多数経験している。

そこで今回、デジタル式顎運動計測装置 (ARCUSdigma II) の機能の一つである Adductoin Field を使用して、患者本来の咬頭嵌合位を維持した状態で最後方臼歯補綴装置を製作するための咬合採得を試みたので報告する。

II. 方法

患者は初診時36歳の女性。下顎右側第二大臼歯喪失による咀嚼障害を主訴に来院。

他院でインプラント治療を勧められたが、治療方法に不安があり当院を受診された。そこで欠損部補綴には下顎右側第二小臼歯および第一大臼歯を支台歯とする延長ブリッジを用いて補綴を行う治療計画を立案した。

はじめに治療開始時の咬頭嵌合位の状態を検査するために、デジタル式顎運動計測装置 (ARCUSdigma II, カボデンタルシステムズジャパン, 東京, 日本) の下顎運動解析モジュール (Motion analysis) を用いて、習慣性閉口終末位と咀嚼終末位との三次元的な位置関係にずれがなく一致していることを確認した。

咬合採得にはこの咬頭嵌合位を維持するために ARCUSdigma II の咬合採得モジュール (Adduction Field) を使用した。習慣性閉口終末位と一致した咬頭嵌合位をターゲットエリアとして設定し、術者と患者の両者がそのエリアでの下顎位をモニター上で把握した。咬合採得法は咬合盤を用いた咬

合印記法を選択した。この咬合盤は即時重合レジン (フィクスピード, GC, 東京, 日本) を用いて作製した。顎間記録採得のために口腔内で即時重合レジンを咬合盤上に添加し硬化時間 (3分間) 中、モニター上でそのエリアを術者と患者の両者で確認し続け下顎位を維持したり。上下顎石膏模型の固定には、採得した咬合盤を作業模型の支台歯に装着し固定力が偏らないよう自作のウェイトを使用して、均等な力で上下顎模型が固定できるようにした。

咬合器は半調節性咬合器 (PROTAR evo7, カボデンタルシステムズジャパン, 東京, 日本) を使用した。咬合器装着ではインサイザルピンがインサイザルテーブルから浮き上がらないよう、使用する咬合器装着用石膏は可及的に少量にとどめた。

咬合接触状態の検査には咬合接触検査材 (パイトチェッカー, GC, 東京, 日本) によるブラックシリコーン法を用いて、作業模型上および口腔内の咬合接触状態を評価した。

III. 結果と考察

最後方臼歯欠損に対し延長ブリッジによる補綴を行うにあたり、その咬合採得に ARCUSdigma II を用いて補綴装置を作製した結果、

1. プロビジョナルレストレーション装着時の咬合接触状態と最終補綴装置の咬合接触状態が合致した。
2. 最終補綴装置装着時に咬合調整を必要としなかった。

以上のことから、咬合採得時に誤差を生じやすい最後方臼歯欠損に対する補綴装置製作において、咬合採得に ARCUSdigma II を用いることで、患者本来の咬頭嵌合位を維持した補綴装置が製作できることが示唆された。

IV. 文献

- 1) 岡下慶太郎, 中村健太郎, 山本司将, 細川稔晃, 高梨知宏, H. W. Lang. ARCUSdigma II を用いた咬合採得による臼歯部欠損補綴症例. 日補綴会誌 2014 ; 6・123回特別号 : 303.